



高橋教授の

# この人に 会いたい

Vol.97

ゲスト

# 阿南英明

氏

地方独立行政法人

神奈川県立病院機構

理事長

2025年6月公開の映画『フロントライン』。クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」で発生した事実に基づく物語で、日本で初めて新型コロナウイルスの集団感染と最前線で戦った者たちを描いている。そのモデルとなったのは、地方独立行政法人神奈川県立病院機構の阿南英明理事長。対談では、その阿南理事長を高橋泰教授が直撃。映画の背景や実際のクルーズ船での取り組み、医師としての信念について素直に語り合った。

## 映画『フロントライン』で描かれた 人道主義に迫る

### 船内は、まさに現代の 蟹工船だった

高橋 2020年2月、神奈川県横浜にクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」が入港し、乗員・乗客3711人のうち712人が新型コロナウイルス感染症に罹患。日本で初めて新型コロナウイルスの集団感染に向き合う現場となりました。この時、クルーズ船に乗り込んで最前線（フロントライン）で対応に当たったのがDMAT（災害派遣医療チーム）でした。阿南

先生は、このDMATの指揮官として現場で指揮に当たりました。2025年6月公開の映画『フロントライン』は、このクルーズ船での実話をもとにした物語です。阿南先生にお話を伺います。まず、どういう経緯でお話が来たのでしょうか。

阿南 2020年の5月ごろだったと思います。企画から脚本・プロデュースを手掛けた方からアプローチがあり、いろいろなことをお話ししたことが最初です。知人から「怪しい人間ではないから話

を聞いてやってほしい」との依頼もあり、1回1〜2時間の取材が何度も何度も繰り返されました。その中で「この時はどうしたのか、それはなぜか」といった深掘りや質問が何度となく行われました。その後、私以外の関係者の取材も加え、脚本が出来上がっていったのでしよう。ファクトチェックの要請にも応えましたが、完成した脚本は届きませんでした。2年くらいが経ち、「この話は流れてしまったのか」と考えていたところに連絡があり、「映画化すること

になった」と言うではありませんか。脚本を短くするために再度ファクトチェックをしたのが2022年、23年のことです。そして克蘭クインが24年でした。高橋 クルーズ船で印象に残ったことは何でしたか。  
阿南 当時、乗客の動きにメディアの注目が集まっていたのですが、私には乗員の方々に非常に頑張っていたことが強烈な印象として残っています。中には感染してしまった乗員もいたのですが、私たちは乗客だけでなく乗員の彼

撮影＝関口宏紀

ら・彼女らも忘れずに助けなくてはいけないという想いに駆られました。私が目にした光景は、室内に2段ベッドが2つ置かれた船底の窓のない4人部屋で顔を真っ赤にして咳き込んでいるフィリピン人の女性乗組員たちの姿でした。私は直感的に「まさに現代の蟹工船だ」とまで感じました。彼女たちの安心のため「フィリピン人の部屋を作れ」と口にする場面があ

ります。私にとっては思い入れのあるシーンです。映画には、「人道主義」という言葉が繰り返し出てきます。私たちは少し違う言葉で表現していましたが、象徴的な言葉に置き換えていたのだと思います。

高橋 私にとって一番印象的だったところは、アメリカ人夫妻の夫が重症化し下船、残された奥様が自殺しそうになり奥様も同じ病院

へ搬送させようと検疫の係員とのやり取りを描いたシーンです。検査は「規則」ですから「できない」と、日本のコロナ対策で欠けていた問題点が描かれています。長いやり取りの後に奥様は夫の元へ、映画の最後の方で奥様から「今回の経験を通し、人の思いやりを強く感じられるようになり、日本に来てよかった」とメッセージに書かれていましたが、この一連の流

れが、私は好きです。この「人道主義」は、阿南先生たちの活動の根本にあるのだろうと感じました。  
**悲劇を回避する医療が  
ゴールになる**

阿南 私たち災害医療を担当している医療従事者にとって、スローガンがあります。何を柱に据えて私たちは活動するかを考えるためのスローガンです。外傷救急医療の現場には「Preventable Trauma Death」（防ぎ得た外傷死）という言葉があります。きちんと医療を施せば救える外傷死は助けられるということ。災害医療ではこれを引用して、「Preventable Disaster Death」（防ぎ得た災害死）を目標に活動してきました。しかし、近年は少し考え方を変更しています。

一番大事なことは、悲劇の回避なのではないか？ ということです。私たちは人として生まれ、最後は例外なく死んでいきます。どこからがいけない死で、どこからが受け入れられる死なのか、線引





## 医療行為を通して悲劇を回避する

阿南

きは難しい。私自身、医師になって30数年経過していますが、仕事の半分は看取りです。単に延命することが正義ではなく、より良い死を迎える環境の支援も大切なことです。避けられない死でも手は尽くしたよね、苦痛は取り除いたよね、家族は満足しただろうか、という気づかいができることは医師として大切な仕事です。ゴールとしては、死なせないではなく、悲劇ではない形にしたい。それを

目指しています。こうした考えは、日常医療でも災害時の医療でも同じではないでしょうか。

この実践を考えると、人道的という表現はまさにぴったりな言葉です。高齢社会の中で、日本中が目指しているゴールではないでしょうか。人生の出口の在り方を考えた場合、命を救うならば何をやっても良いという訳ではありません。

クルーズ船から患者さんを搬

そ原点に立ち返り、人道主義の視点を強くし、その人にとって一番良い老い方、死に方ができるようにすることは医療者の原点ではないかと改めて感じました。

### 主題にあるのは

### 偏見差別問題

阿南 この映画の主題について、私は偏見差別問題だと思っています。私たちは非常に苦しめられました。医療スタッフは、自分の病

院に帰っても差別されました。患者さんを引き受けた病院に対して、かかりつけの患者さんが行くのをやめようといったこともありました。昔のハンセン病における人権問題に似た問題が起きていたように思います。あのようなことはあってはいけません。映画『フロントライン』では、このようなことをきちんと語ってくれていると思っています。人権を蹂躪するような行為は本当に悲しいですよ

## 「人道主義」が阿南先生の活動の根本にある——高橋

## 阿南 英明

Hideaki Anan  
地方独立行政法人 神奈川県立病院機構  
理事長

あなん・ひであき●1965年生まれ。新潟大学医学部医学科卒業。藤沢市民病院初期研修、横浜市立大学救命救急センター、藤沢市民病院救急部などを経て2012年、藤沢市民病院救命救急センター長・救急科部長。19年、同院副院長（～2024年3月）20年、神奈川県健康医療局技監（医療機対策統括官）21年、神奈川県理事（医療機対策統括官）、24年、地方独立行政法人神奈川県立病院機構 理事長に就任。東京科学大学（旧東京医科歯科大学）臨床教授、福島県立医科大学医学部非常勤講師、日本救急医学会救急科専門医・指導医・評議員、日本災害医学会理事・評議員、日本社会医学系専門医・指導医、日本内科学会総合内科専門医・指導医、米国内科専門医会・内科学会(ACP)正会員など。医学博士。

送・搬出する際、その家族と離れ離れになることは非常につらかったです。もしかしたら、今生のお別れになってしまいかもしれないからです。しかし、船内では「あなたはこのうち」「あなたはあっち」と選別され、家族同士が下手をすると何百キロと離れた場所に離されていきました。理由は、病床が不足していたからです。加えて乗客リストがありませんでした。しかし、私たちは「これは良くない」と考え、後半からは極力、同じ病院で接してもらおうよう調整しましたが、船内から769人を搬送しましたが、感染者は712人です。感染していない方やご家族の搬送

ね。そういうことをしないような倫理観が大事で、みんなが持たなければいけないと思いますが、なかなか難しい。ですから、いつも思い出そうね、大丈夫かなと考えるほしいと思います。無意識で悪気もない。いじめと同じ構図ですよ。怖いなとか嫌だなと思うこと、「こつちに来ないで」という

気持ちばかりです。だけど口に出してよいのか、態度に出してよいのか、さらには攻撃してよいのか。怖がることは仕方がないですし、逃げることも仕方がないかもしれません。ですが、攻撃はダメです。これで悲劇が発生しているとしたら、あの映画で大切な主題として描いていることに対して大変感謝しています。あの映画は、医師のヒーロー物語ではありません

## 高橋 泰

Tai Takahashi  
国際医療福祉大学教授

たかはし・たい●1986年、金沢大学医学部卒業、東京大学病院第1第3第2内科・麻酔科で研修。92年、同大学医学部医学系大学院医学博士課程修了（医学博士）後、米国スタンフォード大学に留学。94年、ハーバード大学公衆衛生校に武見フェローとして留学。97年4月、国際医療福祉大学医療福祉学部医療経営管理学科教授。2016年9月より21年3月まで安倍内閣未来投資会議の構造改革徹底推進会合医療福祉部門副会長を務めた

ん。あの背景で苦しんでいる大勢の人たちがいて、それを改めて考えようという物語なんです。

高橋 映画の中で唯一、藤田医科大学だけが実名が出ていましたね。

阿南 そうですね。ベッドの確保は大変な苦勞をしました。そうした中で大規模な受け入れを決定してくださった大学に対するリスククトですね。それは別にマスクミの方が出てきますが、実はモデルがいまません。「どこかで面白がっていませんか」と言われて、ハッとして、そして自分の考えをだんだんと変えていく姿が描かれています。あれは、社会の総体だと思います。過去は仕方がないですが、二度と同じことをしないように伝えることができればと考えています。

高橋 映画『フロントライン』のモデルとなった阿南先生のご活躍に心から御礼を申し上げます。また、映画を通して感じた人道主義については、多くの方にぜひ知っていただきたいと思っています。ありがとうございます。